
Seven Fantasia **異聞東方戦記**

丁・丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seven Fantasia 異聞東方戦記

【Nコード】

N0237Z

【作者名】

丁・丁

【あらすじ】

いつかのどこかの幻想郷・・・かつて博麗大結界に生じた綻びから多くの異形が現れ災厄をもたらした。それらを打ち倒し結界を修復したのは当時の博麗の巫女と一部の妖怪、そして招かれた五人の異邦人達だった。

それから年月は流れ、それが御伽話として語られるようになったころ新たな闇が動き出す。

再び始まる戦いに招かれたのは7人。螺旋の勇者、黄金の英雄、優しきくのいち、仮面の探偵、鋼の父、軍人学生、死神執事等だった。

幻想郷を包み込もうとする間に彼らと住民達はどう立ち向かっていくのだろうか……。

・ 0 プロローグ（前書き）

この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

・0 プロローグ

「まずいわね・・・こんなに早く結界が脆くなるなんて」

博麗大結界の境界で彼女は一人ため息をついていた。

流れるような金髪に派手なドレス、そして大きな傘が印象的な女性だがなんだかとても胡散臭く見える。

「うーん、この調子じゃまた前みたいに外から呼ばないとまずいかもね。幻想郷こゝろにふさわしくない連中もちらほら入ってきてるみたいだし」

幻想郷の妖怪八雲紫やくも ゆかりはふと前回の結界修復を思い出した。

あの時も本来は来るはずのない別の時間の世界からさまざまな異形の存在が結界をすり抜けて幻想郷に流れ着いてしまった。異形は結界の機能不全の影響で変質しておりそれらを排除するために当時の巫女と一部の妖怪達、そしてそれらを倒すべく招かれた彼らは戦った。その結果、結界は修復され元に戻り招かれた彼らは帰っていた。

・・・あれがどれくらい前か彼女はもう忘れてしまったが。

「聞こえてるかしら」

紫は一枚の札を取り出しそれに向かって語りかけた。札には漢字のような文字が書き込まれている。

「何かありましたか、紫様」

札から彼女の式神の声が聞こえた。

「やっぱりあなたの報告通り結界の綻びが広がっているようだわ。それでなんだけど、しばらく家を空けるわね。すぐに帰ってくると思っけど結界がらみで何かあった場合はいつも指示してあるように行動しなさい」

「分かりましたが・・・どちらに?」

「昔の知り合いのところよ、面倒くさいのだけれどね。それじゃ～よろしく藍」

「御意」

軽い口調の主人にやれやれといった声色で式神八雲藍やくもらんは答えた。

「さて、少しばかり疲れるけどしょうがないわよね。さっさとあの女のところに行かなきゃ」

そして紫はスキマに消えていった。新たな客人達を招くために・・・。

幻想郷にはいくつもの伝承がある。それらは幻想郷縁起に大半が記されているが中にはそうでないものも多々ある。そのひとつに五人の英雄の話があった。

かつて博麗大結界が緩み多くの異形の怪物たちが幻想郷に災厄を

もたらした。

その時、外の世界から来た五人の異邦人と博麗の巫女そして一部の妖怪が怪物たちを打ち倒し平和を取り戻したという。

招かれた五人の異邦人はこう語られている。

一人は髑髏の仮面を被り風の如く駆け抜け、

一人は一つ目の真紅の巨人を操り稲妻の如く戦い、

一人は白髪の手で素っ頓狂な騒ぎを起こし夜叉の如く暴れまわり、

一人は左腕が銃で蛇の如く異形を狩り、

一人は異界の姫で大剣を軽々と扱い月光の如く輝いていた。

・・・という。

そして、これから始まる物語もいつか伝承として語られるのだろう。七英雄の御伽話として。

・ 0 プロローグ（後書き）

今回はプロローグのみになります。至らない点が多く素人丸出しの書き方ですがなんとか続けていききたいと思います。

・ 1 『俺にはさっぱりわからねえ!』 その1 (前書き)

この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

1 『俺にはさっぱりわからねえ!』 その1

気がつけば見知らぬ場所で寝ていた。どうも記憶がはっきりしない。

たしかでかくなったシモンを見送った後、突然何かに吸い込まれてやたら胡散臭い姉ちゃんから何かを頼まれた気がしなくてもないような……とりあえず地面の上にはいるようだが辺りは霧で何も見えない。

「じー……」

なんかこう腹が重いし冷える気がする。

「じー……」

視線を感じる気もするがよく分からねえ。てか腹が減ったな。

「じー……むむむッ!!!」

目が合った。なんか青い服を着たガキと思いつきり目が合った。しかも俺の腹に乗ってやがる。

「だれあんた、あたいは最強のチルノだよ」

間髪いれずに名乗られた。しかも最強だと?こりゃあこつちも名乗らなきゃいけねえだろう。俺は勢いよく立ち上がり見えない空を指差し叫んだ。

「いいか耳かっぽじってよく聞きやがれ！螺旋の宇宙そらに悪名轟く
グレン団！その不屈の鬼リーダーカミナ様たあ、俺のことよ！！わ
かったか最強のチ・チ・チ・チロル！！！！」

うん、たしかこいつはチロルとかいってたはずだ。間違いない。な
んといつても俺の耳は節穴じゃないからな。しかしチロルは顔を真
っ赤にしてこちらを睨みつけている。

「チロルじゃない！最強のチルノ！チ・ル・ノ！！わかったかグロ
ン酸のカミラ！」

グロン酸！カミラ！・・・こいつ、わけのわからんことをいって
やがる。たしかに俺も名前を間違ったがこいつほどはひどくない。
一文字違っただけだ。

「ぜんぜんわかってねえじゃねえか！グレン団のカミナだ！カ・ミ
ナ！！！！」

「うるさい！あんななんかカエルみたいに冷凍してやる！覚悟しろ
！！」

チルノがそういうと急に辺りが冷えてきた・・・というよりはチ
ルノ自身が冷気を発して辺りが冷えてきている。こいつは一体何者
だ？よく見れば背中に透き通った結晶が六本生えてやがる。獣野朗
ってわけでもなさそうだが人間でもないようだ。

「なんだとお！わけのわからねえことばっかりいってんじゃねえぞ
！そっちこそ覚悟しやがれ！」

俺は脇に転がっていたソレを直感的に拾いかまえた。

どういわけかあの刀があったのだ。ここにあるはずのない刀。しかし今は考えている場合ではない。チルノの周囲はさらに温度が下がっている。見た目はただのガキだが油断はできないようだ。あつちもスイッチが完全に入ちまつてるようだし、これは面白くなりそうだ。

互いに少しずつ距離を詰めていく。何かを感じているのかチルノも様子をうかがっているようだ。

おそらく勝負は一瞬、それで決着するはずだ。刀を握った手に神経を集中させる。

「へッ！やるしかないみてえだな！いくぞ！！」

「こいー！」

そして両者が一撃を繰り出そうとした刹那、

「ちょっと待った！」

突然誰かの声がした。

「ええと、二人とも落ち着こうよ。ね、チルノちゃんにカミナさん？」

すると霧の中からチルノより背の高い羽が生えた少女があらわれた。

「大ちゃん！」

チルノは今までの状況はどこ吹く風でその少女に駆け寄っていた。

どうやら知り合いのようだがこいつも人間じゃなさそうだ。なんとなくそんな気がする。

「誰だ？」

「私は大妖精つていいいます。みんなは大ちゃんて呼びますけど」

ダイヨウセイ？とりあえずは大ちゃんというらしい。チルノと違ってこっちは話を通じそうだな。

「さっそくだがちよいと聞いていいか。いったいここはどこなんだ？地面の上にいるってのはわかるんだが」

俺はとりあえず質問した。他にも聞きたいことはあつたがとりあえずここがどこかまずは確認しなけりやならないだろう。霧で何も見えないし。

大ちゃんは俺を見ながらすこし考えて話し始めた。

「その様子だとおそらくカミナさんは外から来たんですね。いきなりいわれても分からないでしょうけど、ここは幻想郷の霧の湖です」

聞いたことのない名前ばかりだ。やっぱりわからねえ。

「ゲンソウキヨウ？霧の湖？よくわかんねえ・・・うん、さっぱりわからねえ！！それより腹が減っちまった」

分かっていることは腹が減ってるってことだった。腹は減らなくなつたはずなんだがどういいうわけか腹ぺこだ。

「凍ったカエルならあるよ。ほら」

チルノが凍った塊を差し出してきた。その中央には緑色の生き物が見える。一応食い物らしい。

「ん？おお、すまねえ。んぐぐぐ・・・なかなか硬いな」

それはかなり硬かった。氷の固まりだし当たり前だが。

「ちょ、ちょっと！それ生ですよ」

大ちゃんは驚いた顔でこっちをみている。なにかおかしいことでもあるのだろうか？

「うまいかカミナ」

チルノは得意げにこちらを見ている。どうやら感想が聞きたいらしい。

「冷たくてよくわかんねえ。ま、腹のたしにはなった。ありがとなチルノ」

それを聞いてチルノはにっこりと笑った。さっきまでのやり取りが嘘のようだ。そんな俺たちを見て大ちゃんはほっとしたような呆れたような表情だ。

「・・・とりあえず博麗神社に行きましょう。あそこなら多分なんとかしてくれると思います」

博麗神社という言葉聞いてチルノはおおと声を上げた。

「霊夢のどこか。最近いつてないな。あたいもいくぞ」

「どつやら霊夢というやつが重要らしい。」

「じゃあ三人でいきましょう。私もすこし霊夢さんに聞きたいことがあるし・・・かまいませんかカミナさん」

「そういわれても俺にはそうする以外なさそうだ。」

「かまいやしねえが、その霊夢ってやつがなんとかしてくれるのか」

「そうです。霊夢さんは博麗神社の巫女ですから」

「巫女？よくわからん。だが行くしかない。」

「それじゃあ道案内を頼む。しかし霧でぜんぜん見えねえな」

「辺りはあいかわらず霧で何も見えない。」

「ここはいつも昼間はこんなかんじですからね、私たちはなれてますけど。ただ最近は何でか夜でも霧が消えないんです」

「大ちゃんは困っているといった感じの口調だ。」

「なんでだ」

「それがわからないので霊夢さんに聞こうかと思ひまして」

そして俺は歩き出した。濃い霧の中を二人の妖精に連れられて。

わかねえ・・・ここがどこで何のためにここにいるのか、俺には
さっぱりわからねえ・・・。

・ 1 『俺にはさっぱりわからねえ!』 その1 (後書き)

第1話です。グレンラガンといえばシモンよりカミナな作者です。もっと速いペースで書きたいのですが、なかなか手が進みません。でも書き始めてしまったのでなんとか終わりまでたどり着きたいものです。

では次回まで失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0237z/>

Seven Fantasia 異聞東方戦記

2011年12月7日01時51分発行